

---

# とある民族記

ごはんライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある民族記

### 【Nコード】

N8712U

### 【作者名】

ごはんライス

### 【あらすじ】

実験的作品。ビートルズの「レボリューション9」を参考にして書いてみました。意味がわからなすぎるので、非公開にするかも。か、改稿するか。確か、利用規約に、意味をなさないものは掲載禁止とあったからな……。

昔からよく言われることがある。太古の昔から言われること。確実に言われるその言葉。

「親を殺してでも、生きる。それが人生だ。それが珍生だ」

八月のある日、会社員楠田勝弘は、西山村市にあるステーションBで自殺した。

地元新聞にも載った。雨の日だった。

勝弘の妻、紀子はすでに妊娠していた。

紀子には兄が二人いた。光男と靖男である。光男は正社員で、靖男はアルバイトだ。

「紀子、セックスしようぜ。なあ。いいだろ？」

「いや。兄妹でそんなことできないよ」

「ざああああああ。」

てるてる坊主が悲しげな顔をしている。

扇風機が回ってる。

「いや。やめて。お願い」

「はあはあ。紀子。紀子」

翌年、ヌーダラ共和国で大統領選挙が行われた。マース派のモンバリ氏と、ベンザー派のメッホ氏の一騎打ちである。歴史的な選挙である。これは重大な選挙であった。

その年、ヌーダラ共和国の西部にあるマッスラ市で、世にも奇妙な事件が起こった。

人々が急に踊り出す、いわゆる、ヌーダラダンス事件である。

「ほうれほれほれ。ほほいほい」

「ヌーダラ。ヌーダラ」

「ほほいほい。よっ。ほい」

「ヌーダラ。ヌーダラ」

その日、たくさんの警官隊が出動した。

マッスラ市で大工をしていたトマール・パンズは、ストリート3で、彼女を待っていた。

暑い日だった。すごく暑い日だった。彼女は電話で、バンズに行けないと連絡した。彼女は、その時、ビヤンカ病院にいた。父親が交通事故にあったのだ。

その時、マッスラ市の東部にある、マービヤ市場で爆発音が響いた。

「やばいぞ」

「大聖堂がやられた」

「まじか」

「急げ」

そのことは、マッスラ新聞にも載った。

マッスラ市長のモーブ・パヤンコは、喫茶店で、コーヒーの中に、ミルクを入れた。

「うん。旨い。なかなかいい味だ」

ざああああああ。

24日、マッスラ市街で大暴動が起きた。

「その話は本当か」

「本当だ。嘘じゃない」

「聞いてみれくれ」

ざああああああ。

ざああああああ。

「やめてくれ。その続きをしないでくれ。頼む。早くしろ。急げ」  
マッスラ市の中央町にある、ガッツ・エンターテイメント社では、第二のモーブル会議を始めていた。モーブル・システムは二年前からだ。

クリスを疑うハリス。ハリスは、二番手の男である。

ハリスは、クリスが席を外してる時、クリスのジュースに毒を入れた。

「ハリス。電話だ」

「はい」

「急げ。早く」

「わかりました」

「ざあああああ」

その時間、警官隊が、デモ隊と衝突。

ニュース番組で、キャスターがすっかりミスをした。

「よし。行け」

「ラジャー」

「なるべく急げ」

「了解です。ボス」

「ぱりっ」

「ぱりぱりぱり」

「ぱりぱりぱりぱり」

「どーーーーーん」

晴天に、狂おしい涙が。並じゃない。かなりの量がきていた。三年ぶりだ。驚愕である。

「事実ならいいのだが」

もうしてるのだ。だから、やめにしたらいいのかどうしたらいいのか、迷う。

葛藤が横切った。

「くそっ。胃が痛い。おい。ジョージ。ジョージ。しっかりしろ。大丈夫だ」

「うわっ。うわあ。ガッタミールじゃねえか。ジョージ。上げる。足上げる早く」

「ソムンビルドを、早く。急げ。時間がない」

「早くしろ」

「もたもたするな。2グラム足りないぞ」

「そんなのどうでもいい！ 西から来れば十分だ！」

「わかった。課長が言うなら間違いない」

「構えろ」

どーーーーーん。

がっ。がっ。

ぎりぎりぎりぎり。

「痛い。痛い。痛い」

キツチャムは、手を伸ばすがどうにもならない。

崖から落ちた。

「うわあああああああ」

しつこいことに、ニユースキャスターがまたミスをした。今度は重大なミスだった。許されないミスだから、みんな怒った。殺してやると叫んでいた。

キャスター、モース・ベリーヤは、そういうこともあったから、つい、明日のことばかりを考えてしまう。神経質になってる。

しかし、今日は休日。仕事から離れ、心安らげるために、夕焼けを見ていた。涙が出そうになるベリーヤ。

「モウいいのかな……でも……」

それこそが、真実味のある夢、ベリーヤの愛であった。半か丁かでも、ベリーヤの妻、モツスは気にしなかった。

そっという女じゃなかったてことだ。

ざあああああああ。

扇風機が回る。

回るたびにため息が出る。切ない日々が続いた。

しかし、それはすばらしい日々でもあった。

これはかなり、すばらしい日々。そう思う。

しかし、技術者ゴッス・マチュリソンは、決心した。もう待てなかった。

しかし、心が揺れ、つい、甘い香りを思い出してしまった。

ざあああああ。

どーーーーーん。

「早くしろ。もう時間がない」  
「ばしゃっ。ばしゃっ。ばしゃっ。」

結局、ゴッスは、色々考えたが、三年前から帰宅部だから、それはやめにした。どうしてもだめだった。あきらめるしかなかった。他に方法がなかった。あれば、やっていたかもしれない。もう、わからない。どうしても、わからない。

ざあああああああ。

ソームは、ライム試合場で、二度目のチャレンジに燃えていた。

ライム試合場は、ボウゾ市の南にある。ボウゾ市は、四年前に、ゴーム村とベヤング市が合併してできた。

確かにいける。間違いない。かなり、効率がいい。

後ろから、光が。

「誰だ」

「や、やめろ」

「それだけは、いかん！」

「うるさい！」

「でも、こうするしか」

ボームの弟マメンダンは、「じゃあ、まずやってみよう。準備してくれ」とみんなに指示した。

ざあああああああ。

扇風機が回ってる。

ニユースキャスターがまた間違い、周りは混乱した。どうしようもない雰囲気の中、みな、苦しんだ。どうしたらいいんだ。これもだめか。でも、時間がない。どうすればいいんだ。そういう雰囲気だった。

ざあああああああ。

扇風機が回ってる。

回りすぎた。

どうした。もういいのか。西か東か。どっちだ。西でもいい。し

かし、それは……どっちだ。

しかし、こうなれば、それも夏までの話。夏が終わればよし。こういうことだ。

西の方から来たりて、ブルース栄える。それゆえに、豊穡。それが、要。勇氣。希望。

燃えるのも時間の問題だ！

ざああああああ。

ホープリティに虹がかかった。すがすがしき、そういうスメル。スメルを。

明日から、そう、スメルを。

スメルを二週間分！

「だから、スメルを。いいか。スメルを。もういいんだ。わかった。スメルだよ。十分に行け。スメルを投げて愛を確かめる。降参するな。これも童貞だ。いいか。わかったか。もういいんだ。それもだ」

バームル・ゴンズー・サムリットは、電話を切った。

「よし。クリモンダル・システムにしろ」

マジか。いいのか。でも……よし。

「行け！！」

「だめだ」

「行け！！」

「だめだ絶対にだめだ」

喧嘩が始まった。

ソنبウナン！ ソنبウナン！ ソンボウナン！

ガッツ・ソنبウナン！！

おしまい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8712u/>

---

とある民族記

2011年7月15日03時25分発行